

震災を生き抜いた子どもたちが学んだ津波の歴史と防災 地域に学ぶ教育実践の記録・釜石東中学校(1)

森本 晋也・土屋 直人*

(2017年3月3日受付)

(2017年3月6日受理)

Shinya MORIMOTO, Naoto TSUCHIYA

The Tsunami History and Disaster Prevention Learned by the Children who Survived the Disaster :
A Regional Studies Lesson at Kamaishihigashi Junior High School (1)

本稿は、東日本大震災を生き抜いた釜石東中学校の子どもたちが、震災前に学んだ津波防災に関わる学習内容を報告するものである。震災前に行われた学習とは、地域の津波の歴史や防災に関わる調査学習、学習したことを劇やDVD映像として地域へ発信した活動、地域住民の防災意識を高める活動、小学校と連携した避難訓練などである。この学習は、地域を自分たちの足で歩き、地域に学び、地域ぐるみで取り組んだ実践内容である。本実践の意義は、第一に、子どもの実体験、実感的な学びを指導の過程のなかで重んじ、またそれを地域に学ぶ学習活動を通して実質化している点、第二に、子どものリアルな学び、自発性・主体性を励ましている点である。他方、本稿は、津波防災学習の必要性を自覚した一人の教師が、地域の方々や同僚との協働の中で、「津波の常襲地域」に生きる子どもたちに必要な学びをいかに模索し構想・実践していったか、その過程の記録でもある。

第1章 緒言

本稿は、第一著者の森本が、3・11東日本大震災より以前に、釜石東中学校およびその前任の釜石第二中学校で、同僚らとともに構想し実施してきた一連の学校教育実践(全校や学年・学級での、総合学習、歴史学習、学習発表会の表現活動、等々[表1]参照)の取り組みの展開の具体を確かめるとともに、地域に教材を探り、地域を歩き地域の歴史と現実に学ぶ教育実践を行ってきた、中学校教師・教育実践者としての森本の足跡を、森本自身が自らの手で書き記す、連続した複数の論考の、第一報をなすものである。以後、実践者とし

ての森本自身が、あらためて想起した(その当時の思考(そして志向))を含め、これまでに残している教育実践記録等の具体的な事実(既発表の報告内容を含め)を、複数の角度から再構成し、時代を追うかたちで、数本の論考に分けて記述し、論じてゆくことを予定している。第二著者の土屋は、森本が書き記した一連の学校教育実践、社会科等で展開した地域学習実践の諸特質、釜石東中学校での防災学習の展開の史的背景、土壤に何があったのか、その有する史的意義、その全体像が今後に示唆する視点や展望を考える。そして、3・11以前の森本の仕事をあらためてとらえなおしながら、森本の実践内容の意義について、検討する

*岩手大学大学院教育学研究科

ことを試みる。その意味で、この一連の諸論考は、実践者の立場から森本が中心的に論考を記し、土屋もその考察に参加する、共同での研究報告の試みである。

第一報となる本稿は、森本が、第2章から第9章において、本稿の課題意識・目的、3・11時の釜石東中学校の避難状況を述べ、2006年度の学年総合の学習・指導の展開、2009年度の全校防災学習の展開について記述し、最後に共同で考察を加えた。

なお、本稿を含め、以後、次のような柱を持つ諸論考を予定している。

- ・釜石東中で取り組んだ津波防災学習の実践
- ・三閉伊一揆、「三浦命助」の実践—生徒の作文の分析から—
- ・総合学習の展開（3年間）—地域の歴史に学び、自分の生き方を考える実践—
- ・地域の戦争を掘り起こし、戦争と平和を考えた実践
- ・地域をテーマに取り組んできた実践の全体を振り返る（まとめ）

第2章 課題意識・目的

1 釜石東中学校の立地状況

釜石東中学校は、大槌湾にそそぐ鵜住居川の河口にあり、海から数百mのところの位置していた。鵜住居小学校が向かい合う形で隣接し、両校とも津波による浸水予測図（ハザードマップ）の外側になっていた。理由は、明治三陸大津波と昭和三陸大津波での浸水域と津波の高さから考えて、鵜住居川の堤防を超えないと想定されていたためと思われる。しかし、学校では校舎が鵜住居川の堤防より低い場所にあり、津波に備えて市の指定した避難場所である「介護福祉施設」（当時農協の資材置き場）か、学校の東側にある勾配の急な山への避難訓練を行っていた。

2 釜石東中学校の避難状況

2011年3月11日午後2時46分、大地震が発生した。当時の先生方や生徒の話によると次のような避難状況であった。

学校は、地震が発生したとき放課後であった。教室で帰りの会を行っていた学級もあれば、部活動に参加している生徒、卒業式の準備をしていた生徒たちもいて、校地内でバラバラの状況であった。大きな揺れのあと、副校長が校内放送によっ

【表1】地域に学ぶ教育実践の内容

年度	実践した学校名	地域に学ぶ教育実践の内容
2009	釜石東中学校	全校防災学習「EAST-レスキュー」 1学年総合「てんでんこ ¹⁾ 」、1学年社会科・国語科合科学習「三閉伊一揆～三浦命助の生きた時代～」
2008	釜石東中学校	3学年総合学習「地域の夢、私の夢」
2007	釜石東中学校	2学年総合学習「Iron Road」、2学年社会科「大島高任の生きた時代」
2006	釜石東中学校	1学年総合学習「てんでんこ ¹⁾ 」～地域から学ぶ津波の歴史と防災～
2005	釜石第二中学校	全校総合学習「ふるさとを見つめて」（釜石艦砲射撃・オランダ人捕虜）
2004	釜石第二中学校	全校総合学習「ふるさとを見つめて」（釜石艦砲射撃・戦争体験）
2003 以前	釜石第二中学校	選択社会科「釜石における近代製鉄の歴史」 3年社会科「大島高任」「釜石艦砲射撃」「戦争体験」など

て避難の指示を出そうと思ったが、停電のため放送機器が使えなかった。しかし、生徒たちは、訓練で行っていたようにグラウンドに集まってきた。ある生徒は、「揺れの大きさと時間の長さからプレート海溝型の地震だ。津波が来る」と思ったという。

体育館にいた生徒たちは、部活動を始める直前で、生徒9名で準備運動をしていた。以前、体育館の照明が落ちことを思い出し、体育館の中は危ないと判断し校庭へでた。校庭は、地面が割れ走りづらい状況であった。スクールザックやサッカーボールを持って避難している生徒に下ろせというのを聞いてその通りだと思った。それは、様々な状況を想定して、津波の速度を体感した学習を行った際、重い鞆を持って走っていたら無理だと友達とも話していたこともあり、そういうちょっとした知恵から自分たちで声がけをしていたと思うとのことであった。中には、校庭で部活動をしていて、あの大きな揺れで腰を抜かしてしまった生徒もいた。しかし、その生徒は、友達が手を差し伸べてくれて起き上がった後、頭は真っ白であったが体が自然と動き走り出した。体が覚えていたという。

通常の訓練では昇降口前で整列・点呼をとってからの避難であるが、避難の指示を出していた副校長は、津波の到達まで時間が無いかもしれないと判断し、集まり始めた生徒と教師に率先避難者になるよう指示した。そして、集まってきた生徒たちは、「ございしょの里」への避難を開始した。途中、鶴住居保育園の園児らと一緒にになった生徒は、幼い園児たちの避難を手助けしながら避難場所へ向かった。同じく津波の襲来まで時間が無いと判断し校舎の三階に避難していた鶴住居小学校の児童たちも、地域の人の助言と中学生の逃げる姿から教師の指示により「ございしょの里」へ避難した。このとき、中学生の避難する姿をみて、避難した地域の方もあった。

「ございしょの里」では、崖崩れが起きていた。地域の方からの助言もあり、さらに高台の「介護福祉施設」へ避難した。このとき、ある生徒は、

自分自身も不安であったが、震えていた小学生の手を握り「大丈夫だから」と声をかけながら避難したという。さらに高台の「介護福祉施設」に到着した直後、津波の襲来が見えた。このとき、ある生徒は、「道路の後方をみると、保育園の先生が1人で3人くらいの子どもの手を引いて走っていた。それを見て、やばい逃げ遅れると思った。小学校5～6年生が園児をおんぶしたり、だっこしたりしているのを見て、自分もしなければと思った。少し戻って2～3歳の子を抱きかかえ避難した。途中、坂を登れないと思い、友達のお父さんがいたのでお願いした。『助けられる人から助ける人へ』というのを学んでいて、自分もやらなければという思いがあった。そして、『てんでんこ』というのを学んでいたの、この距離だと戻っても大丈夫だと思った」と話す。黒い壁のような津波が襲ってくる状況下、先生方、生徒たちは、さらに高いところ高いところを目指し必死で昇り、逃げきった。

3 発災直後、釜石へ駆けつけて

震災直後、釜石市教育委員会へ災害応援として駆けつけたとき、保護者や地域の方々から震災前の学校での防災教育の取組に感謝の言葉が寄せられた。集落が壊滅的な被害を受けた両石地区の方々が入っていた避難所を訪れたとき、卒業生のある保護者が「先生、防災教育に取り組んで頂いて本当にありがとうございました」と言われた。また、ある保護者は、「生徒が校舎を使って赤い矢印で示した津波の高さを思い出し、もしかしたらあのような高い津波が来るかもしれないと思い避難して助かった」と話し、何度も学校の取組に感謝していた。さらに、地元の漁師の方で、大きな揺れの後、家族を確認しようと自宅に戻ると、以前中学生が配布してくれた「安否札」が玄関に張ってあったので、避難場所へ移動した。その直後に津波の襲来があり、間一髪で難を逃れることができた。自宅で家族の安否を確認していたら間に合わなかったかもしれないとのことで、生徒の活動のおかげだと感謝していた人もいた。

だが、防災教育に取り組んでいてよかったとい

う思いもある反面、教え子や保護者、お世話になった地域の方々が多数犠牲になられている。もっと早くから、そしてもっと保護者や地域を巻き込んで防災教育をやっておけばよかったという後悔の念が強く残っている。これからの防災教育に少しでも役立つことがあればという思いから、本稿による報告や後述する東北工業大学の小川和久教授との調査研究を行おうという考えに至ったものである。

4 主題について

先述の釜石東中学校の生徒の避難行動については、震災前から取り組んでいた防災教育と合わせて、マスコミでも大きく取り上げられ、教科書²⁾をはじめ内閣府や気象庁の啓発用DVD³⁾など様々なところで紹介されている。その取組について、釜石市で防災教育を指導してきた群馬大学の片田敏孝教授の立場からの著書⁴⁾は多くあるが、学校で具体的にどのような学習が行われたのか、なぜそのような学習が行われたのか、実践者の視点から記されたものは少ない⁵⁾。そこで、本稿では、学校の防災教育の担当者として企画し、実践した立場からその内容を報告するものである。なお、本実践は、学校の同僚教師とともに構想し実践したものであるが、あくまでも森本の視点から報告するものであることを申し添えておく。

本稿の目的は3つある。1点目は、緒言で述べたように、地域に学ぶ教育実践の意味を考察するための基礎資料とするものである。本教育実践は、森本がこれまで地域をフィールドとして取り組んできた一連の教育実践の営み(表1参照)から着想を得た内容が含まれている。2点目は、史的記録として残すことである。釜石東中学校は、校舎が被災して当時の資料はほとんど残っていない。震災の前年度までであるが、学校でどのような教育実践が行われていたのかを記録として残すことに意義があると考えます。3点目は、森本は、現在、先述の小川とともに安全教育の立場から、学習経験が避難時の意思決定・行動選択に及ぼした影響や、将来にわたり記憶に残る学習など、今後の防災教育のあり方を探るため、震災前の学校での防

災教育の教育効果に関わる調査研究⁶⁾を行っている。その基礎資料とするものである。

第3章 教師の意識変容

森本は2001年に釜石第二中学校に着任してから、地域を題材とした授業づくりを意識して取り組んできた。しかし、2002年7月10日に校舎が床上浸水になり市内では土砂災害による死者も出た台風災害や、2003年5月26日に体育館の天井からコンクリート片が落下するなどの校舎被害を出した宮城県沖地震(震度5弱)を経験したが、社会科等において地域の自然災害について大きく取り上げたことはほとんどなかった。また、津波に対しても、地理の授業で釜石市役所消防防災課を取材し、津波による被害や市の取組を紹介した程度である。津波を大きく取り上げなかった理由として、当時ギネスブックにのるほどの湾口防波堤が建設されていたこと、学校が浸水予測区域外にあったことから、学区内は大丈夫であろうという意識があった。避難訓練の重要性は感じていたが、正直、防災教育の必要性はあまり感じていなかった。

防災教育に対する意識が変わるきっかけとなったのが、2006年1月に釜石市教育委員会が市内の全教職員を対象に開催した防災教育研修会であった。研修会では、河東眞澄教育長(当時)が、「宮城県沖地震の発生が高まる中、災害が起きたとき子どもたちの被害をゼロにしてほしい」という思いを語った。

そして、講師であった群馬大学片田敏孝教授は、事前に市内の児童生徒、保護者、教職員に対して行ったアンケート結果⁷⁾を紹介した。その内容は、児童生徒は地震が発生した後、どのような行動をとってよいか分からない。保護者は、家庭で津波防災に関する話を話していない。教職員は、内陸出身者が多く津波について知らない。このような意識では、子どもたちの命を救うことはできないというものであった。また、この地域は、津波の常襲地域であり、年表を示しながら津波は必ず

来る。さらに人々の心には、「正常化の偏見」が働き、自分は大丈夫だろうという気持ちになり、避難しない。災害発生時に生き抜くための知恵が、「てんでんこ」であるという内容であった。

最も印象に残っていることが、津波の常襲地域という言葉である。歴史的に必ずこの地を襲うという言葉に、この地域に生きる子どもたちには、津波防災の学習を行っていく必要性を感じた。研修会后、職場でも津波防災の学習の必要性について話題になったと記憶している。

その後、釜石東中学校への転勤が決まり、赴任後の学年総合において何を地域の題材にするか考えた。そのとき、以前から地域をフィールドとした学習を行う際にお世話になっていた釜石市教育委員会の森一欽氏に相談した。森氏からは、2006年が明治三陸大津波から110年という節目であり、題材として取り上げることを勧められた。森本自身の中でも前述の研修会を踏まえ津波防災に対する必要性を感じてきていたこともあり、着任前から津波防災をテーマとした総合学習の構想を考えていた。そして、森氏には、実際に進めていくにあたり、講師・地域での協力者の紹介、地域に残る記念碑などの調査学習先の紹介、発表機会の提供など本実践を進めていく上で協力頂いた。

第4章 1学年総合「てんでんこ」（2006年度）

1 学習計画

2006年4月、森本は釜石東中学校に着任し1学年主任となり、学年の3名の先生方に1学年の総合学習のテーマについて相談した。当時の釜石東中学校の総合学習の計画では、1学年は「郷土かまいし」というテーマで、3つの単元「地域の調査学習」「ボランティアスト（全校縦割り班でのボランティア活動）」「福祉体験学習」から構成されていた。そこで、「地域の調査学習」のテーマとして、津波を取り上げ、次の計画を立てた。

（1）テーマ

「てんでんこ～地域から学ぶ津波の歴史と防災～」

（2）ねらい

- ① 津波の体験者や史跡を調査し、津波の被害の大きさだけでなく、当時の人々の苦労や先人の知恵、苦労を乗り越えるたくましさなど先人の生き方を学ぶ。
- ② 津波や災害からどのようにして命を守ればよいか防災について学ぶ。
- ③ 学習したことを全校や地域の方々に伝え、表現力を身につける。
- ④ 調査学習で学んだことを地域に発信することで、地域との交流を深める。

（3）計画

5月…オリエンテーション

6月…津波学習講座（6/6, 6/9）、調査計画づくり、質問事項の作成

7月…調査（7/11）

9月～10月…調査内容のまとめ（レポート）、展示発表準備、ステージ発表準備、文化祭（10/28）

11月～…鵜住居公民館（11/17）、新入生体験入学の行事（12/12）、釜石市民会館（2/3）

2 学習の具体

（1）オリエンテーション・津波学習講座

最初のオリエンテーションでは、学習のねらいや進め方について説明した。また、津波学習講座では、地域で津波の歴史について研究している上飯坂哲氏⁸⁾を外部講師して招き、2回にわたり講座を開催した。上飯坂氏は、校長として勤めた大槌町立吉里吉里小学校に残されていた明治三陸大津波の記録の調査をはじめ、釜石市、大槌町での津波の歴史を掘り起こし、津波への備えについての啓発活動も熱心に取り組まれてきた方である。

講座では、上飯坂氏から生徒とともに教師も多くのことを学んだ。例えば、当時宮城県沖地震が30年以内に99%の確率で発生すると言われていた。その99%という数字を体感するため、100本のくじを用意し、生徒たちに順番に引かせた。また、地域の津波の歴史の紹介と、インド洋大津波を題材として取り上げ、スリン島において、「海に異変を感じたら避難する」という言い伝えが

残っていた地域では被害が少なかったことが紹介された。そして、自分たちの地域に伝わる「津波でんでんこ」の意味、いざという時に瞬時に判断し、行動するためには普段の学習や生活が大切であること、そして将来「助けられる側から助ける側」になってほしいというメッセージも生徒たちに伝えられた。生徒とともに上飯坂氏から学んだことは、その後の釜石東中学校での防災教育を考えていく上で基盤となった。

(2) 地域での調査活動

表2のようにグループごとにテーマを設定し、調査活動を行った。16のグループが、学区内の津波被害の歴史や、昭和三陸大津波やチリ津波の体験談の聞き取り、津波記念碑の調査、市や地域での防災の取組などについて調べた。事前に質問事項を調査に協力して下さる方や郷土資料館に送付

した。

調査活動では、例えば、両石地区を訪れた生徒たちは、最初、地域で防災活動に熱心に取り組んでいる瀬戸元さんから過去この地区にどのような津波災害が襲ったのかを地域を歩きながら学んだ。その後、両石地区の漁船センターでグループごとに、昭和三陸大津波やチリ津波の体験談の聞き取りを行った。体験談の中でも特に印象に残った内容がある。昭和三陸大津波を経験した方の体験談の内容であった。体験者は、幼い頃、闇の中、命からがら避難した経験を語り、最後にメッセージとして、災害に備えるということは、「いつも靴を揃えておき、いつでも履けるようにしておくこと」や「寝るときには、枕元に服をたたんでおき、夜中に地震があったとき暗闇でも直ぐに服を着ることができるようにしておくこと」など、普

〔表2〕 調査内容一覧

聞き取り・ 史跡調査 (12グループ)	①津波の体験者から聞き取り調査を行う。 ②津波の被害についての史跡を調査する。 《鵜住居地区》聞き取り(2)《両石地区》聞き取り(4)、史跡調査(1)《箱崎地区》聞き取り・史跡調査(1)《片岸地区》聞き取り(2)、史跡調査(1)《釜石地区》聞き取り・史跡調査(1)
津波の調査 (3グループ)	①津波の被害全体を調査する。 ②当時の被害の様子などの写真、資料の収集を行う。 《釜石市郷土資料館》明治三陸(1)、昭和三陸(1)、チリ地震(1)
防災 (1グループ)	①津波が発生するメカニズムを調査する。 ②津波から身を守るには日頃からどのように対策をとればよいか調査する。《釜石市役所消防防災課》(1)



写真1 「調査活動」

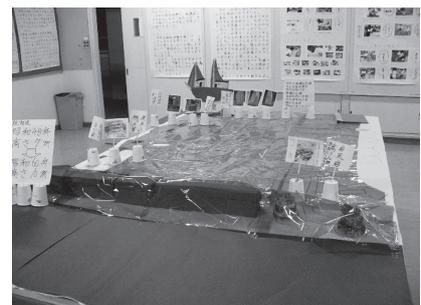


写真2 「文化祭での展示発表」

[資料1] 調査活動を終えての生徒の感想 (「1 学年通信」 No.9 2006.7.12より)

○体験談のお話を聞いて、一番印象に残ったのが、「津波をなめたらいかん」と言われた時です。津波をまだ経験していないので、絶対に津波をなめてはいけなと言われてました。そのほかにも、私たちに津波のことについてたくさん語って下さいました。私は、小西さんの話を聞いて、もっと津波について知りたいという気持ちが強くなっていきました。

○今日は、片岸の津波の歴史について調べた。史跡や柏崎龍太郎さんの体験談を聞いた。記念碑に書いてあった「大地震のあとには、津波が来る」という言葉がすごく印象に残った。…昭和三陸大津波で死者が一人も出なかったというのは明治での経験が生かされている思った。自分も大人になったら柏崎さんのように伝えていける大人になりたい。

段の生活が大事であることを話された。また、この地域に伝わる「でんでんこ」の意味についても地域の方々から教わった。過去の津波災害の経験から、「津波の時は、てんでんばらばらに逃げる。絶対に家に戻ってはいけな」という内容である。災害が発生した時、各自が瞬時に判断し避難行動をとるためには、家族で避難について話し合っておくことや普段の生活が重要であることを、生徒をはじめ教師もとともに学んだ。

(3) 学習のまとめ・発表

調査活動の後、各グループはレポートを作成しまとめた。また、文化祭では、これまで調査してきたことを、展示発表とステージ発表として保護者や地域の方々に発信することとした。展示発表を担当した生徒たちは、模造紙でまとめたものを掲示するだけでなく、両石地区の津波記念碑の模型や、両石地区に明治三陸大津波でどこまで津波が押し寄せたかが分かる地図を作成した(写真2参照)。また、ステージ発表では、構成劇として発表した。オープニングでは、上飯坂氏の講座から学んだ吉里吉里小学校の記録から明治三陸大津波のことを紹介し、続いて、昭和三陸大

津波の体験談を寸劇として、最後に、学年全員で構成詩の朗読、合唱を行うという流れであった。



写真3 「鶴住居公民館での発表」

[資料2] 構成詩

<p>「でんでんこ」 99パーセントの確率が迫り 歴史は私たちに告げる どこにも向けられることのない怒りを 大切な命が一瞬で奪われる恐ろしさを 孤独になることの悲しみを 悪魔のような存在を 悲惨な歴史の中で人が語る 沖が光り 海が鳴き 鬼のように迫る波 崩壊する町 木っ端みじんに砕け散り、重なり合う家々 船は陸に上がり、屋根が海に浮かぶ 自然の爪痕と呼ぶには、あまりに大き過ぎる光景 死にもぐるいで逃げる人々 悲鳴の後には何も残らない いや、人々の叫び声までも飲み込んでしまっ 流した涙が地に落ちることは決してない 何も言えず、立ちすくむ老人 「どこにいるの」幼い子の名を泣き叫ぶ親 「おかあさん 会いたいよ」親を捜す幼い子 大切な人の命も、家族という絆も 波が人間のすべてを奪ってしまう</p>	<p>それはまさに、地獄絵図 実感し尽くせない津波の恐怖 忘れることが許されない記憶 受け継がなければならない事実 先人の言葉「でんでんこ」 先人の思い「でんでんこ」 一つしかない自分の命を自分で守る 私たちは学び、そして語る 私たちの命を守るために 私たちの家族を守るために 私たちのふるさとを守るために 私たちの未来を守るために</p>
---	--

構成詩は、生徒一人一人たちがこれまで学習して印象に残ったことや感じたことを言葉として書き出し、全体で集約しそれを国語科の教師の指導のもとまとめたものである(資料2参照)。この構成劇は、文化祭だけでなく、鶴住居地区公民館や釜石市民文化会館でも発表し地域の方々に伝えた。

3 津波警報発表時の各家庭の避難状況

地域をフィールドとして、地域の方々から津波の歴史や防災について学んだことは、生徒だけでなく教師にとっても大きな意味があった。この地域に生きるものとして、津波防災についての学習は必要不可欠なことであり、日常生活において備えることの大切さを学んだ。

しかし、大きな課題も浮き彫りとなった。文化祭後の2006年11月15日に、千島列島東方沖を震源とする地震が発生し、釜石にも津波注意報が発表になり、市からは避難指示が発令された。しかし、対象地域の避難率は低かった⁹⁾。翌日、この避難指示に対して、生徒たちの各家庭はどのように対応したか担当が確認したところ、ほとんどの家庭において避難していなかった。この時の避難の低さは、後の2010年放送のNHK「ためしてガッテン」において、津波から逃げない地域としての事例として取り上げられた。この番組では、学校で津波について学習している子どもが、家族に避難しようと呼びかけるが、家族から避難する必要は無いと言われたケースも紹介された。学校で津波への備えを学習しても、実際、避難指示が発令されて避難しないという状況について、職員の中で話題になった。このとき、家庭や地域を巻き込み、学校・家庭・地域が一体なった取組を行っていくことの必要性を感じた。

第5章 釜石市での防災教育の取組

2008年度の途中から釜石市として「津波防災教育の手引き」の作成に向けて取組がスタートした。沿岸部にある学校がそれに協力することとなり、2009年度、小学校の低学年部会、中学年部会、高学年部会、中学校部会のワーキンググループがつ

くられた。各学校での実践を踏まえながら試行錯誤の中で教材が作成された。釜石東中学校では、森本と理科担当教員がこのメンバーの一員となることとなった。また、学校内でも新たに防災教育の分掌をおくこととなり、森本が担当することとなった。

2008年度、県防災教育研修会や先進地視察の機会があり、その後の取組の大きなヒントとなった。2008年6月に岩手県防災教育研修会に参加した。研修の中で、岩手県と岩手大学が作成した防災教育DVD¹⁰⁾の説明と学校で津波防災教育を進めていく際の計画を立てる演習があった。防災教育DVDには、津波の学習に関する教材の素材集、宮古市での防災教育の取組の指導計画や指導案が収録されており、その後釜石東中学校での取組及び手引き作成に大いに参考になった。プレート海溝型地震と津波の発生メカニズムがアニメーションとして分かりやすく学習できる教材も収録されており、実際に活用した。また、今後学校でどのような防災教育に取り組んでいくかを考える演習では、釜石東中学校の地域の実情として、昼間は釜石市内の中心部に働きに出る人が多く、さらに高齢者の方が多いという状況を考慮した取組が必要であると感じたことを記憶している。

2009年2月に、津波防災教育を先進的に行っている三重県尾鷲市立尾鷲小学校と、和歌山県広川町の津波防災学習センター、広川町の防災の取組を視察した。尾鷲小学校で、特に印象が強く残ったのが、避難訓練前の学習をどのように行うかであった。当時の校長先生から、子どもたちが避難訓練を真剣に取り組むための気持ちを、訓練までの学習で醸成していくことが重要であると話された。尾鷲小学校では、津波に関する資料を校内に掲示し、全校朝会で津波の話をするなどの事前取組を行ったとのことだった。このことが後述する「防災オリエンテーション」の学習の企画につながる。

稲村の火の館（濱口梧陵記念館、津波防災教育センター）では、津波の伝わり方を学ぶ「津波シミュレーション」の実験装置や、吹き抜けになっ

たホールでこの地を襲った津波の高さを体感できるコーナー、災害対応に関わり「応急」「復旧」「予防」を学ぶことのできる「イナムラレンジャー」という体験的テレビゲーム、3D津波映像シアターが印象に残っている。この経験は、後述する防災学習の企画に大いに参考となり、切実感を持たせるための全校防災オリエンテーション、1学年総合の津波を体感する学習、「てんでんこレンジャー」DVD作成のヒントとなる。

手引き作成では、2009年度のワーキンググループの最初の会議で、群馬大学片田敏孝教授から、「我々は、防災の専門家。発達段階に応じて、子どもたちにどのように教えるといいのか、それは、教育の専門家である先生方に考えてほしい」という内容の話があり、その通りであると感じた。森本は、中学校部会班長となり、部会のメンバーとともに手引き作成を行った。このワーキンググループの会議がよかったことは、小学校で具体的に何を学習するかが分かったことである。同じ内容を学習するにしても中学生という発達段階を考えたとき、どのように重み付けをすればいいのかを考える機会になった。また、ワーキンググループの会議には、市役所消防防災課の方々がいつも来ていて何か必要なときは連絡してくださいとの話があった。実際、森本が防災の学習を企画・実践するにあたり、最も連携した先は市消防防災課であった。地域の防災リーダーの方の紹介、消防や福祉団体など様々な関係機関への仲介、リーフレットなど資料の提供、起震車体験の実施などで協力を頂いた。また、群馬大学片田研究室にも防災に関わる教材の提供、防災に関する質問・相談など、大学の専門家と直接連絡できたことは、試行錯誤の中、計画を立て実践する上でとても心強かった。

そして、「手引き」作成で心がけたことがある。それは、自分の学校で使える、実践できる「手引き」にすることであった。部会メンバーの所属校である釜石東中学校、唐丹中学校での実践が「手引き」に反映される形をとった。

第6章 全校防災学習「EAST-レスキュー」(2009年度)

1 全校での取組スタート

釜石東中学校では、それまで津波への備えとして、学校から高台への避難訓練を行うとともに、年度始めに在宅時や登下校中に津波注意報・警報が発表になった場合の避難場所や避難方法を各家庭で確認し調査票に記入し、その調査票を家庭と学校で持っておくという取組を行っていた。

2009年度からは、市の防災教育事業の連携協力校にもなり、全校体制で本格的に防災教育に取り組んでいくこととなった。校内組織としては、新たに防災教育特別委員会も設置された。森本は、引き続き防災教育担当となり企画を提案していく。どんな防災教育をおこなっていけばよいか試行錯誤であったが、副校長をはじめ同僚と常に相談し、話し合いながら企画・実践していった。以下、具体的な実践内容について述べる。

2 防災教育プログラム「EAST-レスキュー」【ねらい】

- ① 「自分の命を自分で守る」～津波の知識を身につけ、避難できる生徒の育成～
- ② 「助けられる人から助ける人へ」～家族・地域社会の一員としての自覚を高め、行動できる生徒の育成～
- ③ 「防災（災害）文化の継承・醸成」～防災文化の継承者の育成～

【ねらいの達成のために】

- ① 津波を知る、避難方法を知る、地域を知る。(知識・理解)
- ② 日常生活においても、考え、判断する。(思考・判断)
- ③ 避難訓練や防災ボランティアストにおいて実践する。(行動)

ねらいを上記のように設定した理由は次のとお

りである。自分の命を自分で守ることのできる力を身につけることを第一にしながら、小学校6年間で防災教育を受けてきたあとの中学校における学習の意義を考え、「助けられる人から助ける人へ」という地域防災の担い手として育成することをねらいとして定めた。現実的な問題として、平日の昼間は、保護者の方々の多くは学区外の事業所に勤めていることが多く、学区内にあった高校が統廃合により無くなったこともあり、高齢者と幼児、小学生、中学生が残されているという状況である。そのような中、災害が発生したとき、避難時や避難所等において中学生の役割が大きいと考えた。

また、ねらいを達成するために、「地域」「津波のメカニズム」「避難方法」などの知識や、いざという時、自分で考え、判断し、避難行動がとれるような思考力・判断力、避難訓練や防災ボランティアの活動を通しての行動力・実践力を身につけることが大事であると考えた。

具体的なプログラムの内容としては、各教科・領域において、どのような学習を行うことができるかを全教職員で考え、下記の内容を設定した。その際、それまで行っていた学習や活動で防災として行うことができるものはできるだけ取り入れ、新たに教育課程上の時間を割くことが無いよ

う努めた。そして、防災教育プログラムの名称は、「津波について学習し、手助けできる中学生になろう」という願いを込めて、「East- 東中生」「Assist- 手助け」「Study- 学習する」「Tsunami- 津波」の頭文字をとり、「EAST- レスキュー」とした。

3 防災オリエンテーション

全校での防災学習への動機付けを行うことともに、津波に関する知識を身に付けることを目的として、防災オリエンテーションを行った。全校でこれから始める「EAST- レスキュー」のネーミングを紹介しながら、「助けられる人から助ける人へ」を目標に学習していくことを確認した。具体的な内容として、学区内の津波災害の歴史、地震・津波の発生のメカニズム、津波の特徴、津波から身を守るための判断・行動、地域の言い伝え（津波てんでんこ）などについて、クイズを取り入れながら学習を進めた。学習の最後には、確認小テストを実施して、必要な知識についての定着を図った。

4 小・中合同避難訓練

それまで、小・中別々に行っていた避難訓練を初めて合同で行った。避難場所を「ございしょの里」にして、経路については、少しでも時間を短縮できるよう、中学生は小学校の校庭を通り抜けた。訓練では、保健委員会がケガ人をリヤカーで

【表3】 防災教育プログラム「EAST- レスキュー」

	1 年 生	2 年 生	3 年 生
共通	防災オリエンテーション、小・中合同避難訓練、小・中合同地区集会、防災ボランティア、地域への避難訓練の参加		
教科	ゆれる大地(理科)、地域調査(社会)、耐震(技術)、防災ポスター(美術) 他	自然災害(社会)、災害に備える(保健)、家庭における防災対策(家庭)、防災ポスター(美術)	地域での支え合い(社会)、防災ポスター(美術)
総合	「てんでんこ」(体感学習、フィールドワーク、ビデオ制作、率先避難)	「Tsunami」(津波防災や方訪問、防災ボランティアの劇化)	「本所防災館訪問」(修学旅行における防災の学習)
道学	「災害ボランティア」(道徳)	「避難しない人の心理」(学活)	「語り伝えよ」(道)

※本プログラムは、2009年度の実践をもとに2010年度に向けて計画した内容も一部含まれているものである。



写真4 「小中合同避難訓練」

避難させる訓練も取り入れた。そして、避難場所では、中学生が小学生の整列・点呼も行った。このとき、地域の自主防災組織の方にも来て頂き、地域の方からも講評をいただいた。小・中連携、地域との連携の第一歩となった訓練であった。

5 小・中合同地区集会 (7/15)

夏休み前に、長期休業中の地区ごとの活動や生活上のきまりなどの確認を行う地区集会を、鵜住居小学校と合同で行った。中学生がリーダーとなり、自己紹介を通してお互い顔見知りになること、家庭や地域での生活において気をつけることを確認した。地区によっては、中学生が地図を用意し、津波注意報・警報が発表された場合の避難方法や避難場所の確認も行った。この活動により、地域で生活している時の防災や安全に関して、中学生が小学生の面倒をみなければならないという意識付けの機会になった。

6 生徒会活動「防災ボランティアスト」

(1) ねらい

- ① 防災ボランティアの学習を行うことで、「助けられる人」から「助ける人」への意識を高める。
- ② 地域と連携することにより、家庭や地域社会の一員としての自覚を高め、災害時に行動できる生徒を育成する。

(2) 計画

- ① 事前：生徒への周知、事前アンケート、活動内容の決定、生徒リーダーの決定、協力者との事前打合せ、生徒リーダーとの打合せ、道徳授業
- ② 活動：活動の準備2回(9/18, 9/24)、本番

(9/25), 振り返り (10月)

- ③ 事後：文化祭 (10/31) での展示発表
- ④ 取組の体制：全校縦割りで11グループ (1グループ当たり20人程度)、取組内容は、表4参照。

〔表4〕 防災ボランティアストの活動内容

主な活動内容	関係団体
消火訓練	地域の消防団
救急搬送	地元の消防署
水上救助	赤十字社
応急処置	赤十字社
地域学習 (フィールドワーク・地域の役割等)	地区の自主防災組織
炊き出し訓練	赤十字社・宝来館
防災頭巾づくり	地域の方々

(3) 活動の具体

これまで生徒会活動として、全校が縦割りでグループを組織し、日頃お世話になっている地域に恩返しを行うという「ボランティアスト」(ボランティアと東を意味する「east」を掛け合わせた生徒会による造語)を行っていた。この「ボランティアスト」を、防災をテーマに行うこととした。活動の前には、全校で災害ボランティアについて、学級ごとに道徳の授業を行った。兵庫県の高校生による豪雨災害時のボランティア活動を紹介した新聞記事を題材に、自分たちの地域で津波が発生した場合、避難時や避難場所でのどのような活動ができるかを考えた。避難するときには、小学生や



写真5 「災害ボランティアの学習」

高齢者の手を引いて手助けすることや、避難場所で食料の配給の手伝いなど、具体的に自分たちのできることを話し合った。

「防災ボランティアスト」の活動内容については、生徒と教師からのアイデアをもとに設定した。生徒から出されたアイデアの一つに「安否札」の作成と配布があった。その生徒は、地域のために何ができるかを家族と考え、この札の作成を思いついたという。その「安否札」というのは、「○ ○は、△△へ避難した」と安否を示すことのできる札を用意し、避難時に玄関に貼付け、家族や安否確認に来た方に知らせるというものである（写真6参照）。この「安否札」の配布をはじめ、すべての活動は、地域の方々や関係機関と連携し行った。各グループは、3年生のリーダーを中心に活動を行った。災害が発生したときには、中

学生としてできることを行いたいという意識が高まり、学校が地域や関係団体と連携する機会にもなった。

7 美術科での「津波避難の家」のステッカーづくり

釜石市と群馬大学で「津波避難の家」という取組を構想していた。これは、津波注意報や津波警報が発表されたとき、子どもたちが「津波の避難の家」になっているお宅に行くと、避難場所へ避難誘導してくれるというしくみである。「こども110番」の津波版ともいべきものである。このことに関わって地域への説明会が鶴住居公民館で開かれた。その中で、鶴住居小学校と釜石東中学校の防災教育の取組も発表した。ステッカーの図案については、群馬大学でいくつか候補を考えていたが、森本から群馬大学に中学生に図案を考え



写真6 「防災ボランティアスト 安否札配布」

〔資料3〕 防災ボランティアストを終えての感想(「学校通信」No.20・21 2009.10.7より抜粋)

- 地震が起こった後、15分ぐらいで津波が来るかもしれないので、自分たちがしっかりと避難場所を把握して、逃げる手助けをしたい。
- いつ起きるか分からない災害が、もし起きたときに、ケガをしている人たちを率先して手助けしたい。
- 臨機応変に対応し、自ら進んで、そこらにあるものを使い、処置したい。
- 自ら進んで地域への活動をしたい。もしもの時、お年寄りの家に行きたい。
- 実際水の中で人を助けることは、楽勝だと思っていたけど、今日やってみてすごく難しかった。・・・あわてないで、習ったことを自分でできる範囲で助けたい。
- 災害にあった人の精神状態は不安定になるので、あたたかい声をかけてあげて、助けられる側から助ける側になりたい。
- 津波がここまで来たのかと思った。本当に来たらのみこまれてしまうと思った。大人がいなくても自分たちで担架をつくり、ケガした人を運べるようにしたい。
- ここは、災害が起こりやすいことを学習した。なお年寄りの方が多いので、災害が起こったら大変なことになると思った。災害発生時には、自ら進んで地域への活動をしたい。

させてくれないかと申し出た。図案を作成することは、防災の学習につながると考えたからである。全校で冬休みの課題として取り組み、校内で選定を行った。候補作品を釜石市に提出し、群馬大学と釜石市で選考し1年生が作成した図案がステッカーとして選ばれた。

第7章 1 学年防災学習「てんでんこ」(2009年度)

2009年度、再び1学年主任となり1学年の総合学習の担当となった。2006年度からずっと同じ学年所属の同僚が2人いて、自分を入れて5名の1学年の同僚とともに津波をテーマに取り組んだ。2006年度の実践を踏まえながら、全校での防災学習での計画と連動させながら学年総合を計画した。その際、全校での防災オリエンテーションや教科・領域等で学んだことを、自分の問題として捉えさせたいと考えた。そのためには、習得した知識を体感する学習や、地域から学び、地域に発信する学習が有効であると考え、下記の学習を計画し実践した。

1 学習計画

(1) ねらい

- ① 津波について、体感する。
- ② 地域を自分たちの足で歩き、津波の歴史や体験談から防災について学ぶ。

- ③ 先人たちの教えなど学んだことを多くの人に広める。

(2) 学習計画

6月～7月…オリエンテーション・調査テーマの設定(6/9)、質問事項の作成、津波体感①速さ(6/15)、津波体感②揺れ(6/30)、調査学習(7/14)

8～9月…調査学習のまとめ

10月……津波体感②(高さ)、展示発表準備、ステージ発表準備、DVD制作、文化祭(10/31)

11月……鶴住居小学校や近隣の幼稚園等での啓発活動

※てんでんこレンジャーが訪問して津波防災の啓発活動を考えていたが、この年、新型インフルエンザの流行により断念する。

2 学習の具体

(1) 津波を体感する学習

「地震の揺れ」「津波の高さ」「津波の速さ」についての知識とインド洋大津波の映像から津波についてのイメージはつかむことができていた。これらの知識をイメージだけでなく、体感させるために、実験を試みた。「地震の揺れ」については、起震車を活用し、親子で阪神淡路大震災や関東大震災の揺れを体験した。そして、家の家具固定な



写真7 「津波の高さを体感」



写真8 「津波の速さを大感」

どの点検を各家庭で行うよう働きかけた。「津波の高さ」については、学区内でもっと津波の高さが高かった両石湾の13.4m（明治三陸大津波）の高さを、校舎を使って計測し、津波の高さのところに赤い矢印で示した。4階にまで届く矢印を校舎の下から見ることで高さを体感した。大船渡市綾里地区は、20メートルを超えていたので、ろうかを使って生徒が並んでみてどのくらいの距離になるかを試みた。「津波の速さ」については、深水と速さの関係から、沿岸部では一般的に時速36km程度の速さになるといわれている。そこで、校庭を使って、時速36kmの自動車と競争することで津波の速さを体感した。このとき、ただ走るだけでなく、ケガした友人を背負ったり、リヤカーを引いたりするなど、避難する際の様々な状況を考え試みた。実験の結果行き着いた結論は、早く避難行動を開始しなければ、津波に追いつかれてしまうということであった。

（2）調査学習（フィールドワーク）

① ねらい

ア 津波の被害の大きさだけでなく、当時の人々の苦労や先人の知恵、苦労を乗り越えるたくましさなど、先人の生き方に学ぶ。

イ 津波など災害からどのようにして自分たちの命を守ればよいか学ぶ。

ウ 学習して学んだこと（災害文化）を全校、地域の方々に伝える。

② 計画

ア 事前活動：オリエンテーション、課題づくり、質問書づくり

イ 調査活動：7月14日（火）3校時～5校時：フィールドワークの実施

ウ 事後活動：調査学習のまとめ、お礼状作成

③ 具体の取組

グループごとにテーマを設定し、学区内の津波記念碑の史跡調査や、チリ津波の体験談の聞き取り、郷土資料館での津波の歴史などの調査を行った。自分たちの足で地域を歩き、津波について学習することで、自分たちの地域が津波の歴史と共に歩み、そこには人々の災害から生き抜く知恵や、

その教訓を後世に伝える先人の思い、さらに地域の方々が津波災害に向き合って生活している様子を肌身で感じることができた。地域の方々から学んだ「津波てんでんこ」の意味を改めに心に刻んでいた。

（3）地域に伝える活動

学習したことをまとめ、地域に発信するため、文化祭において展示、構成劇（自作の詩、寸劇、DVD映像）と発表した。発表に向けては、生徒たちのプロジェクトチームが中心となり、学年教師全員が関わって準備した。発表の中でも、DVD映像は、地域の方々への啓発用として小さな子どもにも分かるように、「てんでんこレンジャー」が「てんでんこの教え」を中学生に伝えていくとストーリーとした。最初、津波警報が発表になり、中学生が家族に避難しようと呼びかけるが、「これくらいでびびっているのか。本当に危ないときは、みんな逃げるから、地震情報でもみておけ」というエピソードで始まる。そして、「てんでんこ」の教えとして、高いところを目指して避難すること、いつでも避難できるよう普段から準備しておくこと、避難した後家族と再開できるよう落ち合う場所を確認しておくことなど、基本的な内容を紹介した。地元のケーブルテレビの協力で撮影・編集を行い、制作風景や完成したドラマ仕立ての映像はケーブルテレビで何度も放映された。また、群馬大学片田研究室の協力でパッケージ付きのDVDとして配布した。最後に、津波の調査学習のまとめの作文を読み上げるシーンの中で、「こうすれば大丈夫という方法はありません。いざとい



写真9 「てんでんレンジャーの撮影風景」

うとき一番頼りになるのは、鍛えられた自分の心構えと備えなのです」という台詞がある。これは、先述の上飯坂氏の「津波てんでっこ考」から引用した言葉である。

(4) その他の取組

祖父が孫に津波のことを語り継ぐ内容の生徒作文を使った道徳「語り伝えよ」や、「正常化の偏見」「集団性バイアス」「率先避難」について学習する学活「避難しない人の心理」等の学習も行った。各教科や領域での学習が、全校での避難訓練や生徒活動にも結びつくことで、学習効果を高めることができた。

第8章 2010年度の取組に向けて

2009年度末、防災教育担当として、次年度の計画づくりを行った。釜石東中学校での勤務が4年目になり異動の可能性もあったが、2009年度の取組みを踏まえ、さらに内容を充実させるために、管理職や同僚と相談しながら構想した。2010年4月、森本は内陸部の一関市教育委員会へ異動となった。2010年度の防災教育担当は3人体制となり、防災の学習に取り組んだ¹¹⁾。

1 「ぼうさい甲子園」「防災教育チャレンジプラン」への応募

2009年度、「ぼうさい甲子園」,「防災教育チャレンジプラン」へ応募した。「ぼうさい甲子園」に応募した理由は、もし入賞することができれば生徒たちの励みになると考えたことと、もう一つは活動資金を得ることができればという思いがあったからである。「安否札」の取組が評価され、優秀賞を受賞し、2年生の次期生徒会リーダーとともに授賞式に出席した。

また、「防災教育チャレンジプラン」は、全国の実践例を紹介したサイトもあり、防災ボランティアの取組の参考としていた。そしてこの「防災教育チャレンジプラン」は、活動資金の応募を行うこともできた。但し、審査員の前で次年度の活動計画のプレゼンテーションを行い、その内容によって助成の金額が決まるという内容で

あった。発表した活動計画は、下記の全校防災学習の内容である。

2 全校防災学習

2010年の1月の職員会議で、2010年度の主な取組みとして、「『安否札』1000軒配布プロジェクト」「『EAST-レスキュー』養成スクール」「防災学習の充実」(2009年度実施した内容以外に、災害医療、宮古工業高校の津波模型などの学習)を提案した。「安否札」の配布プロジェクトを計画した理由は、「安否札」の配布を通して、地域の方への防災意識の啓発、生徒と地域の方が顔見知りとなることで有事の際の「共助」とつながると考えたからである。1,000軒にしたのは、釜石東中学区には約3,000世帯あり、2010年度の生徒数が216名の予定であったので、生徒一人が5軒配布すれば、3年間で全世帯に配布できると考えたからである。さらに、この取組を実施したいと考えた背景には、職員会議資料には掲載しなかったが、2008年度の3学年総合学習「地域の夢、私の夢」の実践において、釜石市で希望学の研究を行っていた東京大学玄田有史教授から、これからのコミュニティでは人とのつながり方として、「緩やかな紐帯」という考え方があることを学んでいたことがあった。この安否札は、地域コミュニティ再生において緩やかな人とのつながりの形成への一助になるのではないかという思いがあった。

また、生徒たちの取組の励みとなる「EAST-レスキュー」の級制度の創設である。この制度では、防災の学習だけでなく、地域の行事への参加、自主的ボランティアを行えば級が上がっていくという地域貢献と生徒の主体性の育成をねらいとして計画した。さらに2月の職員会議では、2009年度の実践に加え、各教科において防災に関する学習内容を有機的に結びつけカリキュラムを提案した。それが先述の表3になる。

3 学年防災学習

2010年度に向けての1学年会において、2年次の宿泊学習での県防災総合センターでの体験学習をはじめ町づくりに関する内容を、総合学習のテーマとすることを構想として提案した。町づく

りをテーマにしたいと考えたのは、これまで防災ボランティアをはじめ、学校での様々な学習でお世話になっていた、地域で旅館を営む女将岩崎昭子氏との会話からヒントを得たものである。岩崎氏は、この地域の未来の町づくりを考えていて、その話を聞いて防災と地域振興の両面を合わせたテーマを設定できなかと考えた。

第9章 震災後の生徒の言葉から

震災後、ある生徒が、マスコミ等で「釜石の奇跡」と言われることについて、「普段取り組んでいたことを実践しただけ」と言った。そして、発災時避難した生徒たちは、先述の調査研究の聞き取り¹²⁾において、震災前の学習について次のように話している。

- (避難の時を振り返りながら)防災ボランティアのフィールドワークに参加した友達から、両石地区で、家族を見に行ったら一緒に流されたということ、「でんでんこ」という言葉、家族が家にいても戻らないという話を聞いた。何で戻ったらいけないんだろうと思い、深く考えて、戻ってはいけない理由は、一人一人が自分の命を守るため、自分たち一人一人が逃げれば、家族も自ずと逃げて再会できると友達と考えた。自分たち自身で考える機会があったからこそ、身に付いていた。父母にこのことを話して、避難経路も見た。お願いだから父母も逃げてとお願いした。お父さんも会社から戻ろうと思ったが、娘の言葉を思い出し迎えに行くのを止めて避難した。
- (避難の時を振り返りながら)中学校での避難訓練では、いろいろなことを想定していて、ケガした人や高齢者がいたら、役をやる人もいて、実際に想像できる訓練だったので、震災があって練習のとおり、練習してきたからいろいろな対応ができた。・・・ございしょの里、高い場所ではない。親からもあそこは危ないと言われていた。先生の言うことは聞きなさいと言われていたが、もし危ないときはそれ(先生の指示)はいいからと家の人から言われていた。高いところと言われていたのに、ございしょの里は高くない¹³⁾、今回は避難

が早かったから助かったけど、走っているうちに津波が来ると思った。

- (今でも印象に残っている学習の理由として)安否札の配布をしながら、地域を歩いて、本当にここに津波が来たらどこに逃げるのだろうかと話していた。防災マップづくりでは、グループに分かれ、みんなが危ないと思うところをピックアップしてきて、ここに津波がきたらどうするか生徒で考えた。人ごとではないと思った。自分たちの住んでいるところがこんなに危ないと思った。フィールドワークで、両石に住んでいる人に話を聞いて、津波記念碑を見た。昔の人が避難した場所も見て、それがすごく頭にあって、自分で行ってみたから大事だと思った。また、「助けられる人から助ける人へ」それがすごくあって、みんなで助からなければとという気持ちがあった。話を聞いているだけだと考えない。自分たちでやると考える。だから印象に残る。
- (今でも印象に残っている学習の理由として)フィールドワークで、自分の目で見て、自分で歩いて、ここまで津波が来たらどうなると思った。ただ話を聞くのではなく、被害のあった土地で話を聞くと思像できる。先生が言うよりは、中学生ながら重みのある言葉だと思っていた。被害の大きさ、人口の何割も亡くなった。調べたことを覚えている。本でも調べて、文化祭でポスター発表もした。防災ボランティアの活動のまとめも行った。学習経験がつながった。親もそれを見たと言われ、地域の人にも発信する文化祭だったので印象に残っている。(これからの学習について)自分の意見を持つ学習。自分で考える。教わって学習するのではなく、調べて、考えることで、実際に経験していないことでも、こういうときどうすればいいかを考え、経験則になる。
- (印象に残っている学習として)避難訓練と防災教育が相まって現実味、現実感があった。だからたかをくくらないで避難することができた。
- (大切だと思う学習として)安否札や防災ボランティアの活動。学校内だけで無く、近所の人を巻き込んでやった。近所の人と挨拶をして、つながりができた。散歩中の人に防災についての意見を聞いた。中学生にとって、つながりのきっかけづくりになった。自分か

らはできない課題ができるようになるきっかけになった。自分から地域の人に関わっていった。

ある生徒が、聞き取り調査の最後に、「先生がこれだけ大事な学習として教えてくれているということは、本当に津波は来るんだと思った」と言った。この言葉を聞いた時、教育実践において重要なことは、何よりも教育に携わる実践者側の姿勢が問われていることを痛感した。この大震災を生き抜いた彼らから、今一度「地域に学ぶ教育実践」や「これからの防災教育」のあり方を学び直す必要があると考える。

第10章 おわりに

ここまで、森本の問題意識と思考の実際、釜石東中での主に2006～2009頃の津波・防災学習、その指導の具体的な展開を、教育実践者である森本自身のことばで記述された内容から、確かめてきた。そこには、地域の方々や研究者らに学び、また時に地域の方とつながり直接的な協力を得ながら、そして同僚教師らと協働しながら、学年・学校ぐるみの教育実践を構想・構築しようとする、森本という一人の教師の模索の営みと、その地域ぐるみの取り組みの実際が、読み取れる。そこには、子どもや保護者らの津波・防災意識の現実、歴史的に見て津波が必ずこの地を襲うという知見を胸に、「津波の常襲地域」に生きる子どもたちに必要な学び（知識内容、学習体験、等）とはどのようなものかを真摯に考え、その自らの教師としての「学び」の中で感じた津波防災学習への必要性を、実際に形にしていく地道な過程があった。そして「手引き」作成への取り組みのなかでも実践構想への着想と見通しを着実に得てゆくプロセスがあり、教師の学びが学習指導を（あるいは「手引き」の内実そのものを教育実践が）先導する局面が窺われる。こうした森本の思考と働きが一つの土壌となって、時に先導しながら、周囲の教職員や関係者らとの協働をつくり、一連の防災教育を形作っていったことが窺われる。ここに、3・

11震災前の釜石東中学校での、学校教育実践の実際とその背景、そのなかで果たした森本らの仕事、その意義の一端を読み取ることができよう。

本稿の第2章で、森本は、「後悔の念」を記しながら、本稿を含めた一連の報告が、今後の防災教育への示唆となればと述べている。この点に関連して、特に子どもの学びのあり方、教師の指導への視座に関連して、本稿に記された教育実践の意義を二つだけ指摘したい。第一に、第9章の生徒のことばにも現れているように、子どもの体感と実体験、実感的な理解を、学習指導の過程のなかで重んじ、またそれを地域で、地域に学ぶ学習活動を通して実質化している点、そうした学びの方法上の実際的な有効性である。例えば2009年度1年生「てんでんこ」の学習では津波を体感し、フィールドワークで地域の津波の歴史を実地に歩いて学び「肌身で感じる」。そうした実感的体感的な学びと発信を通して、生徒は知を己の血肉にしていった。地域は、学習の対象であるとともに学びと発信のフィールドとなっていた。第二に、子どものリアルな学び、自発性・主体性を励ますことである。それは、生徒たち自らが、津波に備えて「どうすればよいか」をリアルに考え、追究・行動する場面を保障し、例えば「安否札」を発信し地域に広めていくことに繋がった。森本は、ステッカーの図案を生徒が考えるよう環境づくりを意図的にしていたが、そこには生徒自身が図案を作成することそのものが防災学習につながるの明確な発想があった。こうした、自ら学び実際に作る（造る、創る）ことを保障すること、そして地域の現実に根ざしたリアルで自発的な追究の保障が、主体的な防災行動、発災後の避難行動につながっていった側面があったことは、第9章の生徒のことばからも窺えよう。

ここに記してきたことの持つ意味は、森本の一連の教育実践の、他の諸側面（地域の歴史を学ぶ実践等）、その全体像をあわせて検討してゆくことによって、より一層具体的・実証的に確かめることができよう。今後の一連の報告の中でも、本稿のタイトルの通り、結果的に津波災害から逃れ

自他のいのちを守り抜いた、言わば「震災を生き抜いた子どもたち」が、どういう学びを重ねてきたのか、その実像を多角的に捉え返し、展望を考えたい。

<註>

- 1) 「てんでんこ」はこの地域の方言で、「てんでっこ」「津波てんでんこ」「命てんでんこ」など、地域によって様々な言い方がある。2006年度は、上飯坂氏著作の「津波てんでっこ考」から「てんでっこ」の言葉を用いた。2009年度は、一般的によく使われる「てんでんこ」の言葉を用いた。
- 2) 小学校「新しい社会5年下」(東京書籍,2014),「小学社会6年下」(教育出版,2014),「中学地理～地域に学ぶ～」(教育出版,2015)などの教科書に釜石市の防災教育の取組が記載されている。
- 3) 津波防災教育DVD「自分の命は自分で守る」(内閣府,2012),津波啓発防災ビデオ「津波からにげる」(気象庁,2012)
- 4) 主なものとして、金井昌信,片田敏孝「利他的効用に着目した防災対応促進コミュニケーション－児童とその保護者を対象とした津波防災教育を事例として－」(『日本リスク研究学会誌』,No.1,pp31-38,2008),片田敏孝『人が死なない防災』(集英社新書 2012),同『3.11釜石からの教訓 命を守る教育』(PHP研究所,2012),同・NHK取材班『子どもたちに「生き抜く力」を～釜石の事例に学ぶ津波防災教育～』(NHK出版,2012)等がある。また、釜石小学校の取組と子どもたちの避難を取り上げたNHKスペシャルを書籍化したものとして、NHKスペシャル取材班『釜石の奇跡』(イースト・プレス,2015)がある。
- 5) 釜石東中学校の教職員が著したものとしては、「総合的な学習の時間」教育実践研究報告書『未来を生きる力・夢を育てる総合的な学習の時間のあり方～地域に学ぶ3年間の学習をと
- おして～』(釜石東中学校,2010),平野憲「地域と共に育む防災教育」(『東日本大震災の記録第1集 明日を見て前を向いて』岩手県中学校校長会,2012),平野美代子「恐怖におののきなながらも、日頃の訓練通りに整然と避難」(『食べる文化』No.440,2012),森本晋也「災害を生き抜くために～東日本大震災の教訓を踏まえて～」(『第38回全国学校安全研究大会東京都学校安全研究大会大会紀要』(2014)などがある。なお、本稿は、これまで森本が記したものを基に再構成したものである。
- 6) 調査研究の中間報告として、中央教育審議会初等中等教育分科会学校安全部会において、「震災前の学校防災教育の成果と今後の方向性～生徒へのインタビュー調査を基にして～」(2016.9.26)として発表。
- 7) アンケート結果については、金井昌信,片田敏孝「津波常襲地域における災害文化の世代間伝承の実態とその再生への提案」(『土木計画学研究・論文集』Vol.24,No.2, pp251-262, 2007)等に掲載されている。
- 8) 「津波てんでっこ考」(2005)をはじめ、「鶴住居村大海嘯記録」「大海嘯 初代海野校長先生の記録 大槌吉里吉里小学校」他多数の資料を復刻している。「津波てんでっこ考」には、普段の生活における備えの必要性が記され、学校で防災教育に取り組む際の「考える観点」として、「自分が成長するする一場面としてとらえる」をあげ、「助けられる人」から『助ける人』へ」という言葉が記されている。上飯坂氏の言葉を、釜石東中学校の全校防災学習のねらいとしたものである。
- 9) 金井昌信,片田敏孝「児童とその保護者を対象とした津波防災教育の実践から得られた課題」(『日本災害情報学会第9回研究発表会予稿集』,pp321-326,2007)を参照
- 10) DVD『津波防災学習教材－子供たちを津波から守るために－』(岩手県・岩手大学,2005)
- 11) 2010年度に取り組んだ実践内容については、5)の平野憲及び平野美代子両氏の著作参照。

- 12) 6)の中間報告において、当時の生徒からの聞き取りした内容についても一部紹介した。本稿での当時の生徒の話は、その際の報告資料から一部抜粋したものである。
- 13) 避難場所を「ございしょの里」としたことについては、5)の森本の著作参照。防災管理の側面については、別の機会に課題を整理し、今後の教訓に活かしていくことが必要であると考えている。